

目的 幕末以来、欧米文化の流入が、衣生活の上にも大きな変化を及ぼしたことは言うまでもない。しかし前代とかわらぬ農耕生活を続けている人々の間では、そうした変動とどのような変化とをいっていいであろうか。かつて東北地方についての検討を行っているので、今回は関東地方での衣生活の変化を探った。

資料 関東諸県の県史、民俗誌、本厚服装史研究室で、明治生活体験者の名く得られた昭和28年から32年に施行された「明治生活調査」等を主な資料とした。

結果 関東地方は、何分にも開北の中心である横浜や東京とその隣接地域である。そのため新しい文化の影響を早速受けることとなった。例えば、明治8年、すでに川崎では米圃産の林檎を収穫しており、その栽培をはじめたのは維新早々であったと云うし、杉田ではオウゴンと植えている。このような具合から、衣生活の変化も前同様に東北地方より一般に早く、明治20年代半ばから30年代にはみられるわけで、町なかと同じ位であることが表い。アウセサリーに属する洋傘・時計・帽子と云った附用品の普及がやゝ東京などよりおそいことが特徴であるが、そう云って本年都宮など明治6年に早くも傘や帽子が「唐物」と云って使われるところもあるなど、場所による進歩の差が著しく、いわゆる「京田舎」のような変化のおそいところと混りあっているところが、都市近郷田舎の長であることを知ることに出来た。